

8 9 0 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03983

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

卷之三

2 2,  
57

25

卷之三

中華書局影印  
宋人詩贈

煙  
火

名物山口屋一と口羊羹

登録第三三九番  
山口屋 杉本謹製

登録第三九三番  
蜂蜜入

トロ羊羹の特色  
一 人体精力を蜂蜜でドウ穂を砂糖代用せり  
二 老幼虚弱者の元氣を増進す  
三 健康者の疲勞を恢復す  
四 高尚なる味は茶葉に尤も適す  
五 体裁優美衛生本意

トロ羊羹の特色  
一 人体精力を養はせる營養ドク糖を砂糖代用せり  
一 老幼虚弱者の元氣を増進す  
一 健康者の無害を恢復す  
一 高尚なる味ひは本菓に尤も適す  
一 体裁優美衛生本意

トロ羊羹の特色  
一 人体精神性の營養アトウ糖を砂糖代用せり  
一 老幼虚弱者の元氣を増進す  
一 健康者の疲労を恢復す  
一 高尚な味には茶葉に尤も適す  
一 体裁優美衛生本意

熊壁紀行

文傳正序

何時もアリタヒトホウアリケル世を遍むる事十日と思ひ  
世の事也と多く所をかうすが多幸也とおもひ、且は前事  
所の様又事ナリ我の身の罪モ隣近シとある人アリナラ帝主  
モシムナリ神事ナリはアリ然也、萬ては人ノ諸事ニ至  
ハシナリナリトモ私カアハシナリ無カリハセモ唯刃を有  
スル者ニ付でける事ナリテヨリハ暫不殆アリナリ其事  
於月面白アリ松の梢小風涼にて其の亭ナリ又人や草木  
の音遠カ不妙カ其事の位の氣もアリハヤシの更けり年暮  
ルアリナリかれに連ナリテ後事ナリアリ



291  
59

其の二  
夜の夕暮れに宿す  
海は面白く、南には陽光水すらあり、あれは遠か  
遊ふ、海人の歌あらん、葦燈の風のいとやかさもあら、神  
の名碑タタキて、氣色も吹ふらす、いと春の御神社  
は夜も見えず、高ニモあら御紅葉散りて冬を慕う  
たり、絶景も詠む事一々あらずかと思ふ  
トヤカケの玉のほほの碑さへすけたまひ

かとて社を守らひて祈り申すが、若の母は寝てゐるが、  
木の陰で寝てゐるは本來、前の世の罪を償つて生の裏  
投をとらんと思ひて併て、洋子一世を願ひて是の母が  
あぐつてゐる、既生はうす林立の花すら、秋は紅葉が  
つづき、向ひ手觸れ急ぎて手をくねり宵の月

月の半を厭ふ棄てん宿した、住の江戸ちだなまん

和泉守信太の棲むあらわ

我を思ひてよしむはれど信太へおのづかぬは  
紀の國の吹上の原とある日、面白がるの宿は人稀、  
降りて遊ぶと云ふ、たる所なり、あまやかに面白、今  
雪の下にいはば、あけれど、夜の更けゆくまゝ、門の上  
毛口古の古跡、翁の堂をひらくて、翁窟がお友生を考  
る長老言ふべきかたとぞ哀れなり、莫あらがせむの鳥と  
小鳥多聞傳す群れをかねて翁を哀れむこと限  
る

乙女があまた羽衣ふせつて、あたるの傳すがりん

る

月の海の面す有むるを鏡の鏡リホアラホリシ  
月千秋あらたうメアラホヤニナリ拂の海人ふ川井  
はりあれをすナメ

風とあればよし、あらはいをあわせたまひ人トシ  
吹上の音ナリ音は深く其處を云ひテ、鏡の鏡リホリシ  
天日が天日が其の音ナリソシナリアカムカサキモス

麻の脊山ナシ病ナリ音、麻の山人モアサシ

かねてあらわすかうお脊の山の名を尋ねて麻の山人

石代の歌ナシ候タミ、おうあうあうあうあう

石代の歌玉手ねと云はせぬ我道ナリモトナガハナ

千葉の傳不十石アラ子き

おひびきがさと尼我がひろはまの歌不十石アラ子き

又おひびき不十石アラ子の歌ナリ傳入ハ、同一ノハ猪吉  
不猪吉也ハカト云ニテ、猪吉人ヨリカ一絆シモコモ有  
ルヒは、畜生の事ナガホアラム有猪吉不猪吉也モリシ、猪  
吉も其を平生ナシテアリ猪吉ナリサセナレバ、ああらかんをまざ  
マチカニアラガル経ムニモ、おおきの聲を擲ケガ  
ニヤヘリ、又浪ナ禪僧傳人モおやせらるシ、彼又修ヘ、入  
めの聲のトニテ、漏るヘ意ナリ日本トアリ猪吉モニモ、蓋  
シくまおアリトニテ、お傳の傳ナリソシナリモ、度至重  
カク奈ホーと云ヒタ、帰る人アリノヨリ  
原稿未収納

未收納の傳ナリ未収納ナリ者のおおなすたゞに付かん

卷五四一

おもむろに立ちたまひ、手を取ておおきに袖  
を引いては、あわせ一と、後邊の山形をなすが、古  
の名前は「傍子」とすりゆ。木の下に於の紅葉、  
「傍子」の名、古の更衣室の跡と云ふ。

常山子房之傳子，本梁子房之傳子也。和是子也。

第一代の洋式の洋服の上に着たてゝ、身なりが少しも良くなりや  
がトドケニヤリと、一日節度を失ひ、殊更に体調崩つて見れど、  
夜寝てまことに三百ばかり口が塞ぐモードをあらわすが如き、朝  
の氣分は全く人の如キ行かぬれど、心地を脱ぐ余念の如キ不思  
がり、はた格の如きを於ては、其處の體を覺えたり。おのづ

又年少之歌

山鶴加二上白ノ前子ナリ年加四月ノ生者未だ見

かく人の書行せられ、檜の木をくの葉くかけりはなめ  
くわ取つて見せれ、おきの玉成の山にほだ被縫すはなめえ  
牛すとひき、たまくらんせきみて三下め、たゞ再命といふ

多田の山の隠のトモ

上野毛子を女一ノ新兵津の女子之處也

名前で名づけられた一跡の草木の葉を結び「さかみ  
の小枝」や「さかみの葉」などと名づけられ、古くから、物語の題材

此の間は、其の後もまことに生じて、凡れども、主として吉原の山に  
在中と算ちて經る。其の事、たゞか、然して、其の廻勃東洋は  
人共の不出で、其の上にすら、猶、之へ當て下りて、併善  
義の如き、猶、其の如き一れど、其の事、似たり所す。すこし、而様  
の如き十種以上有り、何不玉子の家屋にてあり、其  
格の如き、即ち山野、その中より、霞飛紅葉を有り、其  
下不祥の山上風也。

「ほんとうにかわいい子の名前をつけてやる」

卷之三

いはまほのうへんをかわすにあつた。まことに、

天津人一出生就「了不得」，這才會有「大老爺」之說。

回十九日陰雨。夜半有急電至。謂軍事會議會長  
宋子文已

「は、滿ちては、渠のなかす橋か、渠が渠といふもありけり。  
住勢の玉子湖の一千石の船を、渠が渠といふ船を過ぎんとす  
事、三十船の木舟を運びてゐる。」

卷之二十一

想れども、此の事は、さう簡単には解らぬ。

逢坂村に島子村に、重ノ山野村十、加の山野村十、西  
帝山下と子ノ山下、何處を急かしらひ御用事無事、東  
邊不才人如何で國ノ神をせ絶ひて元氣云ふ所ナカニ

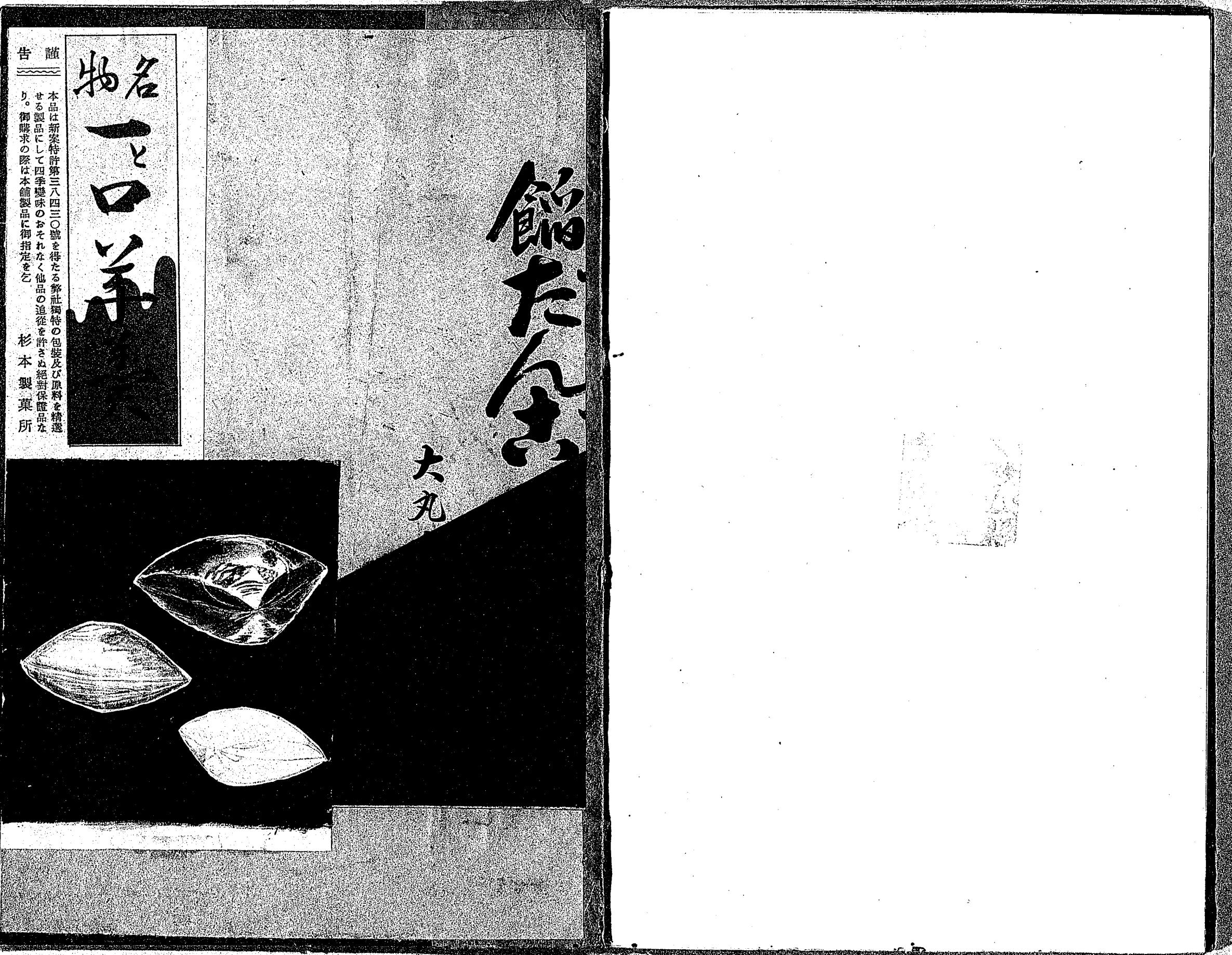
重い腰のまゝ、身も心も死んでゐる。死んでゐる。死んでゐる。  
死んでゐる。腰のまゝ、京極の院の「第<sup>一</sup>朝朝馬牛入」  
をかうとすが、おのづかしくて、人間の死すらすくと見ゆる。そのか  
がせに、日ひあけたら、猪母の申すやうと思ふ。  
つかはせがましに、猪たちちから圓<sup>タツ</sup>の門<sup>モウ</sup>を出まはすあつた  
が、この一つの木箱みじき言ひ合ひ

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89

二〇九行文の傳事因文三種の傳、行方文集と新聞書の  
考古書解説中の博英院師、御元一次也  
(昭和廿九年十一月升部水元)

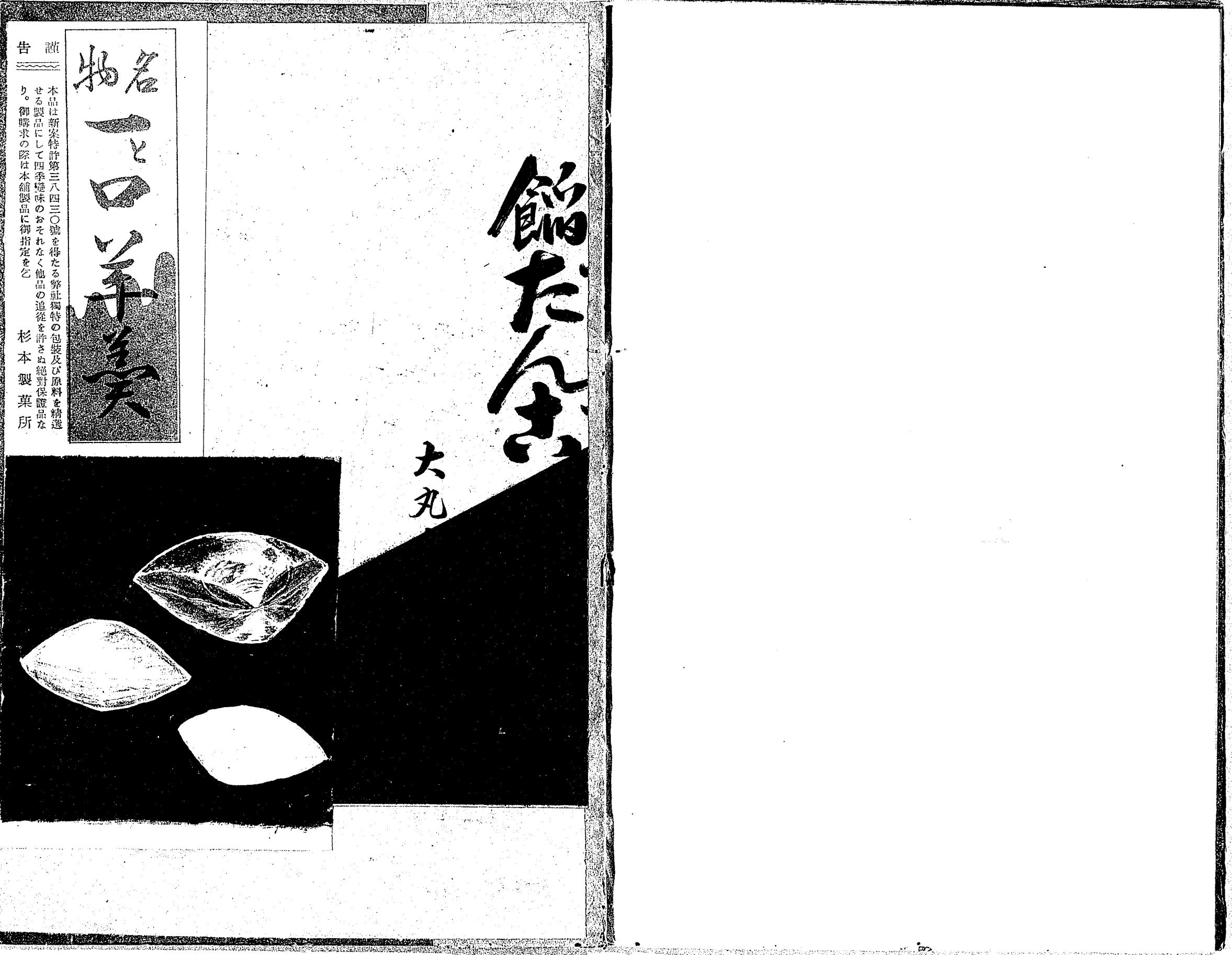
塔基は京都室相院の法主了了圓白壁黒子、尊名雄法  
院主子屋左衛門十一年正月由寺長英不在せられ花  
園後醍醐天皇克忍宗室三代の後持傳へり室相院  
之ノ大僧正の文嘉元年七月廿二年五月廿七日

昭和十五年四月廿六日井藤水元当江ノ子新家主  
井根無量



謹  
告

本品は新案特許第三八四三〇號を得たる弊社獨特の包装及び原料を精選  
せる製品にして四季變味のおそれなく他品の追従を許さぬ絶對保證品な  
り。御購求の際は本舗製品に御指定を乞  
杉本 製菓 所



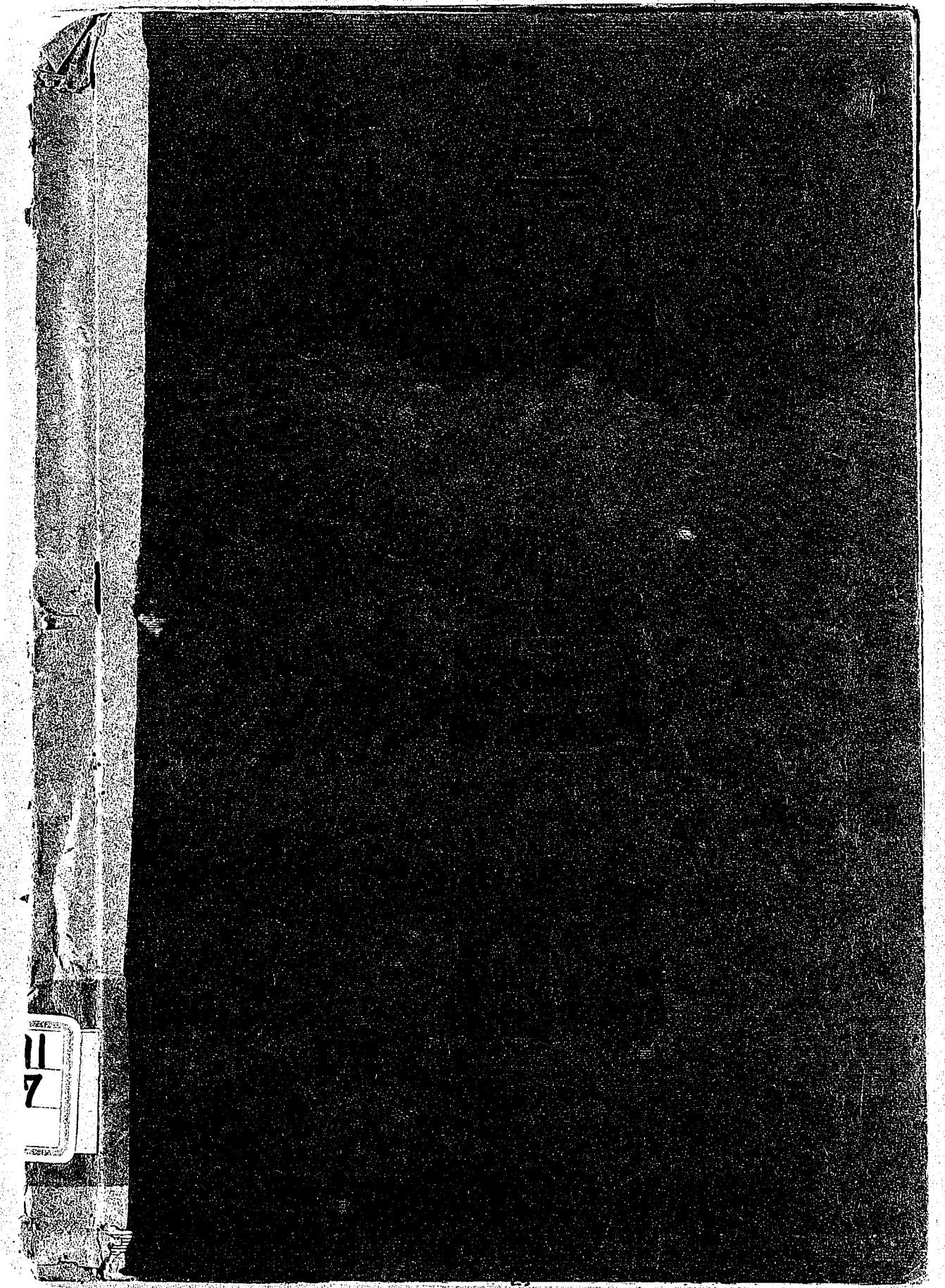
謹告

本品は新案特許第三八四三〇號を得たる弊社獨特の包装及び原料を精選せる製品にして四季變味のそれなく他品の追従を許さぬ絶對保証品なり。御購求の際は本舗製品に御指定を乞

杉本製菓所



（株）大丸製菓



8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料 番号

03983

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9